

赤ちゃんにもお母さんにもやさしい地域づくりに向けての検討

布原佳奈 服部律子 名和文香 武田順子 谷口通英 宮本麻記子 両羽美穂子 坪内美奈 (大学)
高田恵美 高田恭宏 (高田医院) 河合幸子 永田美紀子 (郡上市民病院・産婦人科病棟)

I. はじめに

母乳育児をすることの利点として、児にとっては感染防御、アレルギーの予防、SIDS の発症率の低下等があり、母親にとっては産後の子宮復古の促進、乳がん、卵巣がんの罹患率の低下、産後うつ病の減少等があり、また社会的には医療機関への受診、薬、検査、入院の費用が減ることが明らかにされている¹⁾。平成 17 年乳幼児栄養調査によると、96%の妊婦が母乳で子どもを育てることを望んでいる²⁾が、実現できているのは 42.4%である。健やか親子 21 においても、“出産後 1 ヶ月時の母乳育児の割合”は、増加傾向になることが目標とされている³⁾が、ベースライン 44.8%に対し中間評価においても 42.4%⁴⁾であり、さらなる取り組みが求められている。

母子に関わる専門職は、保健師、助産師、看護師、栄養士、保育士、歯科衛生士、産科医、小児科医など多岐にわたり、母親の望む育児を実現させるために互いの専門性を生かした支援がますます求められている。

本研究の目的は、赤ちゃんにもお母さんにもやさしい地域づくりに向けて所属、職種を越えた母乳育児支援のあり方、課題を明らかにすることである。

II. 方法

今年度は以下の 2 つの取組をした。

1. A 市における赤ちゃんにやさしい地域づくりに向けてのワークショップ (以下 WS)
2. 本学における母乳育児支援に関わる専門職者のための WS

A 市および本学で開催した WS のグループディスカッションについて同意を得た上で記録し、その内容を分類した。また、本学での WS 後のアンケートについては、口頭および文書で趣旨説明を行い、同意を得た上で、単純集計をした。

倫理的配慮: 本研究は本学倫理審査部会での倫理審査の承認を受けている。ディスカッション、アンケートへの協力は自由意思によること、地域、個人が特定されないことを保障し、説明し同意を得た。

協働体制: 大学側が調整をしながら WS の企画を担当し、現地看護職は A 市での WS の場所の設定、現状報告、グループディスカッションへの参加、記録の確認を行った。本学における WS では、グループディスカッションへの参加、記録の確認を行った。

III. 結果

1. A 市における赤ちゃんにやさしい地域づくりに向けての WS について

1) WS のねらい: A 市の母子に関わる専門職が集い、情報交換を通して育児支援 (母乳、離乳、卒乳に関することを中心に) の課題を共有し、赤ちゃんにもお母さんにもやさしい地域づくりに向けて今後のあり方について検討する。

2) 開催日時: 平成 20 年 10 月 1 日 13 時から 15 時 30 分

3) プログラム: (表 1 参照)

4) 参加者について: 計 13 名であった (表 2 参照)。

表 1 A 市における WS のプログラム

内容
挨拶・オリエンテーション
参加者の自己紹介
各施設の現状および日頃、感じておられること、特に話し合いたいこと等 (各施設 10 分程度)
グループディスカッション
グループ発表
参加者から一言、感想・意見

表 2 A 市における WS の参加者

職種	人数
A 病院の助産師	4 名
A 市の保健師	1 名
A 市の栄養士	1 名
小児科クリニックの医師	1 名
本学教員	
保健師	1 名
助産師	5 名

5) グループディスカッションの内容: 課題と支援のあり方は主に以下のものであった。

・母乳育児支援について

⇒母親の気持ち、乳房および授乳の状態、赤ちゃん

んの様子と発育、日常生活、同居家族からの影響など多方面から見ていく。人工乳の補足が医学的に必要な場合は行い、母親が母乳に関して極端にならないように注意する。

・病院では退院後の母子の状態がわからない面がある。

⇒困った時、母親は必ず病院に相談に来るとは限らない。地域や他の病院の声を聞き、ケアにフィードバックしていけるとよい。

・離乳食開始が遅くなることについて

⇒咀嚼、生活リズムへの影響が懸念されるので、6ヶ月間は母乳だけでよいが、それ以降は子どもが興味を示したら開始していく。

・卒乳について

⇒断乳ではなく、卒乳が基本である。栄養面だけでなく、精神面、生活背景など総合的にみていき、個別に対応する。

・妊娠期からの関わり的重要性

⇒ハイリスクの早期発見に努め、外来、病棟、地域へとつなげてフォローしていく。母乳育児に関しては動機づけを行う。

・どの専門職者であっても家庭訪問や乳児健診で要支援者をスクリーニングできる仕組み

⇒マニュアルの作成、エジンバラ産後うつ病のスケール等の活用が考えられる。

・母乳と虫歯について

⇒母乳の前に歯磨きをして歯垢を落としておけば母乳を与えても大丈夫である。

6) A市の強み

・公立であるのでA病院と行政のパイプが作りやすい。専門職者が顔見知りになっており、関係性がよい。

・退院後、2週間健診、1ヶ月健診がある。その後、赤ちゃん訪問がある。切れ間のないフォローができていく。母親の経過がよくわかる病院の助産師も家庭訪問に行き、その後は保健師につないでいる。母子管理表がうまく活用できている。

7) 参加した看護職者の意見・感想

・母乳育児についてなかなか他職種と話す機会がないのでよい機会だった。

・大学が間に入ってもらえると話しやすい

・WSを続けて互いの価値観や困っていることを共有できるとよい。

・保育士や歯科衛生士とも話し合ってみたい。

2. 本学における母乳育児支援に関わる専門職者のためのWSについて

1) WSのねらい：“赤ちゃんにもお母さんにもや

さしい”をモットーに地域の特性、職種の長をを活かして、母乳育児支援について自由にディスカッションし、現状や今後のあり方、課題について共有して、実践の改善のヒントにつなげる。

2) 開催日時：平成20年11月27日(木)

13時から16時30分

3) プログラム：昨年度のWS後のアンケートより、開業助産師の熟練したケアについて知りたい、地域における母子保健活動について知りたいとの意見があったため、今年には開業助産師2名、ベビーマッサージなどを取り入れたユニークな地域母子保健活動をしておられる海津市の保健師に報告を依頼した(表3参照)。

4) 参加者：県内の産科施設、保健センター保健所にWSの案内を郵送した。参加者は、計64名であった(表4参照)。

表3 本学におけるWSのプログラム

内容	担当
はじめの挨拶	岐阜県立看護大学 服部律子
本日のオリエンテーション	布原佳奈
“赤ちゃんにもお母さんにもやさしい地域をめざして”地元で活躍する専門職の活動報告 開業助産師の立場から① 開業助産師の立場から② 保健師の立場から	はっとり助産院 院長 服部美幸 母子ケアルームしばちゃん 院長 柴田美智子 海津市 保健師 堀田美奈
コーヒータイム(情報交換)	
多職種によるグループディスカッション	各グループ
ディスカッションの共有・まとめ おわりのことば	

表4 本学におけるWSの参加者

職種	人数
助産師	30名
看護師	8名
保健師	7名
保育士	1名
保健師学生	4名
助産師学生	6名
本学教員	
保健師	2名
助産師	5名
看護師	1名

5) ディスカッションの内容

5 グループに分かれて、自由にディスカッションを行った。ディスカッション内容は以下のようにカテゴリー化され、主な内容を示した。

①地域と病院との連携のあり方

- ・NICU から保健センターにサマリーを送り、退院までにセンターと情報交換を行っている。その後の様子も、センターから送られてきて上手く機能している。
- ・個人情報保護法の問題もあり、同意がないと保健センターに詳細を伝えられないため、もっと早い時期に家庭訪問ができるようにすべきである。

②赤ちゃんにもお母さんにもやさしい母乳育児に向けて

- ・母乳育児のアセスメントで乳汁の分泌が不足しているのか、分泌はあるが飲めていないのか、飲めていても体重増加が少ないのかを見ていく必要がある。
- ・母体搬送が多い施設である。小児科が母乳にこだわらず、生後6時間からミルクを与えている。スタッフ自身が母乳にこだわっていないというのが現状であり課題である。

③不要な人工乳補足をする母親への対応

- ・乳児健診時、母乳のみでいいが、母親から祖父母にミルクを飲まさなくていいことを伝えきれない場合、「体重増加良好、母乳のみで」と母子手帳に書いて、祖父母に見せたりするよう指導する。母親自ら、言えない場合は、保健師から口添えもできることも伝える。

④母乳だけでは難しい母親への対応

- ・母乳量を重視するスタッフもいるため、スタッフへの教育を行う。量ではなく、直接母乳による母子のふれあいの必要性を説明して精神面でのケアをしている。

⑤NICUでの母乳育児支援

- ・たとえ10ccでもいいので5から6回/日の搾乳を続けられるように看護師が母親を支える力となることが大切である。母乳は10ccでも10ccの効果があるので長く飲ませれば長く飲ませただけの効果がある。

⑥祖父母への教育・支援

- ・育児情報のジェネレーションギャップを埋めることも大切である。
- ・祖父母に子どもを触らせない家庭が増えているが、育児に前向きな祖父母を育て、広げていければいいのではないか。
- ・地域の中で母子保健推進委員のような頼りにな

る近所の人の力を活用できるとよい。

上記以外に、よりよい母乳育児支援のために出された提案は、主に以下のものであった。

- ・多職種が一緒になって各論的にもっと詳しく母乳育児支援を学べる機会があるとよい。
- ・医療者同士の連携を密にすることが大切である。
- ・母親と医療者がつながり、気持ちが一つになることが大切である。
- ・地域で母乳育児支援のネットワークができればいいと思っている。
- ・全例は難しいが、行政を通じて助産師が地域へ出るシステムができるとよい。

6) 本学におけるWSの評価について

WSの終了後に、評価のためにアンケート調査を行った。

①対象：WS参加者のうち、35名より回答が得られたが、アンケートの分析・公表について同意が得られた31名を分析対象とした。職種は、助産師19名、看護師7名、保健師4名、保育士1名であった。

②WSへの参加動機：他施設、多職種との交流が多く、表5のようであった。

表5 参加動機について

内容	件数
①母乳育児について知りたかった	15
②保健師による母乳育児支援に興味があった	4
③開業助産師による母乳育児支援に興味があった	12
④ワークショップ形式で学習できる	4
⑤他施設との交流・情報交換	18
⑥他職種との交流・情報交換	16

③活動報告について

開業助産師の報告および、保健師の報告について、95%以上の者が大変参考になった、参考になったと回答していた。活動報告に対する意見・感想については、表6・7のとおりであった。

④WSに参加して良かったこと

「地域・保健師の活動について知ることができた」、「助産師・看護師の活動について知ることができた」、「多職種・他施設の考えを聞くことができた」、「連携の大切さを実感できた」、「それぞれにジレンマ・悩みがあることを知った」等、であった(表8参照)。

⑤自施設の課題解決に向けての手がかりが得られたか：かなり得られた2名、得られた24名、あまり得られなかった1名、無回答4名であった。

⑥WS に対する要望

「グループディスカッションの時間がもっと欲しかった。」「グループディスカッションのテーマがもっと絞り込んであるとよかった」等の意見があった。

表 6 保健師の活動報告についての意見・感想

意見・感想
・同じ市町村保健師で、取り組まれている内容事業について知り、参考になった
・地域とのつながりがあると、母乳育児が大変継続しやすいことが分かった
・保健師の方の活躍の有無によって随分フォロー体制が違うことがわかった
・いかに地域の人を巻き込むのが大切だと理解できた
・行政の取組みの一端がわかった

表 7 助産師の活動報告についての意見・感想

意見・感想
・積極的に母乳に取組んでみえて刺激になった
・地域における助産師の役割を学ぶことができた
・母親への支えを十分に行うという点で大変必要なことだと思った
・どのような思いで、支援しているのかよくわかった
・助産師の立場からの熱意を感じた
・母親の思いを聴き、まずは労をねぎらうことからはじまるということが印象に残った
・自分自身が病院でケアした後、どう地域とつながっていたか分かり、今後の参考になった
・開業助産師さんという心強い味方がいて下さることが分かったことが何よりの収穫だった
・自分が何か役に立てればと思っていた事が、実は自分の方が勉強させられていたとの言葉に共感した
・母児と関わらせてもらうことで、自分自身の成長につながると思っている
・地域でのフォローの実際を知ることができた
・具体的で地域での活動をする大切さが分かった

表 8 WS に参加して良かったこと

内容
地域・保健師の活動について知ることができた：
・保健師の活動の実際を知ることができた
・地域とのつながりを改めて考える機会となりよかった
・地域の情報を知ることができた
・保健師さんのお話から、保健センターでの母親教室も参加型で実践的になってきていることがわかった
助産師・看護師の活動について知ることができた：
・助産師、看護師などが母乳育児に対してどのような取組をしているのか参考になった
・地域で開業している助産師の意見が聞けてよかった
多職種・他施設の考えを聞くことができた：
・助産師さんや保健師さんの立場、考えの違いなどが聞けてよかった
・キャリアを積んだ助産師さん、保健師さんのお話が聞けて勉強になった
・他職種の意見が貴重だった
・他の施設の方の意見や考えを聞く機会があり、もう少し時間があればと思った
・助産院で助産師さんとお母さん方の関わり方、保健師とのつながりについて知り、勉強になった
連携の大切さを実感できた：
・他職種、他施設での現状が分かり、連携していくことの重要性・難しさを実感できた
・ヒューマンネットワークや連携をとっていく事が大切だと思う
・母乳育児支援というテーマで、色々な職種が連携することの大切さの第一歩と感じた
それぞれにジレンマ・悩みがあることを知った：
・産科・小児科・地域など様々な機関での問題があり、みんな悩んでいる中で支援していることを知った
・病院・地域・それぞれの悩みがあることがわかった
・施設・病院でみられる母子の姿、支援の状況やジレンマを知った
その他：
・今後、指導支援に根気良く、医療面の思いを押しつけることなく、すすめていく必要を感じました
・今後の指導に役立てていきたいと思った
・施設の枠をこえた内容になっていると知り、うれしかった
・こういった交流会はとても意義のあるものだった

IV. まとめ

“地域を限定した A 市における WS”と“本学における全県的な WS”において、所属、職種を越えた母乳育児支援のあり方、課題について概ね検討することができたと考えられる。

今後は、看護職以外の専門職にも参加してもらえるよう看護職を通して働きかけたり、各種職能団体にも WS の趣旨を伝えて参加者を募ること、また WS におけるグループディスカッションのテーマを設ける等、話し合いの焦点が明確になるように工夫していく必要がある。

V. 今年度の評価

1. 看護実践の方法として改善できたこと、変化したこと：A 市における WS では、同じ地域で同じ対象に関わる専門職者どうしが日頃、感じていた疑問や課題を出し合って、対応の方針について確認しあうことができた。本学における WS では、評価のためのアンケートによると 87%の者が自施設の課題解決に向けての手がかりを得られたと回答しているが、参加者が所属する施設のその後の改善状況までは確認できていない。

2. 現地側看護職者の受け止めや認識：A 市における WS については、保育士、歯科衛生士まで対象を広げて継続する方向で考えている。

本学における WS については、母乳と虫歯の関係について歯科衛生士を含めて問題を共有したいという希望がある。また、WS に参加することにより、他施設のスタッフの意識、やる気のある他施設の助産師を知る機会となり、自施設に対する見方が変わり、改善していこうと思えるようになったとの意見があった。

3. 本学教員が関わったことの意義

WS には、助産師および保健師である本学の教員が必ず関わるようにして、それぞれの職種の立場、視点、価値観に配慮して、多職種が交流し、意見交換しやすい雰囲気を作り、WS の効果が高まるようにした。前年度の WS のアンケート結果をもとに、母乳育児支援に関わる専門職者の学習ニーズにそった内容、開催時期、方法になるように WS を企画でき、看護職者の生涯学習支援にもつながったと考えられる。教育面での効果としては、本学での WS には保健師学生および助産師学生の参加を促した。正課外ではあるが県内の育児支援の状況、地域と施設の連携の実際について学ぶことができた。

VI. 共同研究報告と討論の会での討議内容

○“授乳前の歯磨きにより、歯垢を落としておけば母乳を与えても大丈夫”ということのエビデ

ンスは何歳でも言えることなのか？

⇒生活習慣として、歯磨きを行うことが大事である。母乳を欲しがって泣いたら飲ませるというのが基本であるが、生活習慣をつけた上で母乳育児を続けるということが大切である。日本母乳の会による『母乳とむし歯を考える』を参考にするとよい。

○NICU に面会に来る母親に尋ねると、“母乳で育てたい”と言う。でも実際は搾乳が維持できていない現状がある。どう支援していくべきか？
⇒地域の開業助産師など、児の入院中から早めに紹介して地域につなげていくことで、母乳分泌量だけではなく、母乳育児への意思も継続していけるのではないかと。母乳育児への思いを維持していけるよう支援することが大切である。

○地域での母乳相談の場について

⇒B 市では月に 2 回の乳幼児相談を行っている。訪問の希望があれば（3ヶ月児まで）個別に助産師による訪問を依頼している。相談内容は、母乳の事というよりは、子どもの体重増加など発育の過程からみた心配事が多い。

○NICU での母乳育児支援について

⇒C 病院で出産された方は、産科のスタッフが早期から搾乳できるように関わっている。診療所から新生児だけ搬送されて NICU 入院となる場合は全てが早期から搾乳できているわけではない。搾乳を続けられるかどうかは、退院してしまうと母親の生活にかかってくる部分が多い。母親と新生児のつながりのためにも母乳が大切であるということをお伝えするようにしている。

○地域での助産師と保健師の交流する機会について

⇒保健師が妊婦健診に同行した際には関わりがある。B 市でも A 市のような活動ができると良い。

○母乳育児支援の研修について

⇒保健師を対象とした母乳育児に特化した研修は行われていない。保健師個々の意欲によっても知識や情報のレベルが異なる場合もある。地域の保健師には最新のエビデンスなどの情報が入りづらい面がある。保健師、看護師、助産師それぞれの立場からの専門的な支援が必要である。

<引用文献>

1) UNICEF/WHO: Breastfeeding Management and Promotion in a Baby-Friendly Hospital an 18-hour course for maternity staff, 1993, 橋本武夫監訳, 日本ラクテーション・コンサルタント協会翻訳, UNICEF/WHO 母乳育児支援ガイド, 第 1 版; 6-8, 医学

- 書院, 2003.
- 2) 厚生労働省:平成17年乳幼児栄養調査, 2008-10-30,
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0629-1.html>
- 3) 厚生労働省:健やか親子21 別表 各課題の取組の
目標 (2010年まで), 2008-10-30,
<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/mokuhyou4.html>
- 4) 前掲 2).